主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒168-0063
東京都杉並区和泉4-36-10
齋藤典久方　TEL / FAX 03(6786)1006

2022.8
No.111

CONTENTS

1p　巻頭言　……藤本　卓

2～6p 特集
「主体展これまでの軌跡」(前編)
創立～第30回展
(1964年～1994年)まで
[主体美術協会小史から抜粋]

7p　これまでの機関紙担当者から
創立会員への
インタビュー記事
……佐藤　善勇

ART WAVE

8p　●アトリエ訪問 vol.9
故 中城芳裕さん
横浜のご自宅を訪ねて

9p　第57回主体展 企画展示
「私の仕事 いま・むかし」

惜別　我が心の友、
画家 小野 昭を想う
……保坂　淳

10p ●各地の美術展から
「東北へのまなざし 1930-1945」
福島県立美術館
……山田　礼二
「末松正樹(ダンス、ダンス、ダンス)」
埼玉県立近代美術館
……返町　勝治

11p ●フォトエッセイ
「秘密の花園」
……瀧安　順子
「新米担任の苦悩と万年筆」
……大口　満

12p インフォメーション
展覧会記録
編集後記・その他

中城芳裕「へそに咲く花(幼きジョルジョ)」(2015年)油彩、キャンバス 91×91cm

「揺らぎながら生きる」

藤本　卓

量子論や宇宙物理学に関する本を割とよく読む。もちろん素人向けだがそれにしても因数分解すらあやしい理数系苦手男がなぜこの分野に惹かれるのだろうかと改めて考える。特に関心をもつのは宇宙の始まりに関する「真空は無ではない」「揺らぎが無から有を生んだ」という説である。

宇宙の誕生前の無すなわち真空は、何もない空間ではなくその中にエネルギーを持っており、真空中のいたるところで素粒子が突然ポッと生まれ次の瞬間には消えてしまうということを繰り返していたらしい。つまり真空は完全な無ではなく常に無と有との間を揺らいでいた。そしてその揺らぎの中で、ある素粒子が虚数から実数の世界(質量を持つ我々の世界)にたまたまポンと躍り出てしまった。そこから宇宙の生成と膨張が始まり、その結果として百数十億年後に我々が地球に住んでいる…歌唄いはメロディーを奏で、私も絵を描いている。無が有を生む。何と魅力的な理論だろうか。

ところで古来歌唄いにせよ絵描きにしろ、ものを創る人間は常によりよい表現のために豊富な経験や深い思想・確かな技術を自分の中に蓄えることを使命としてきた。有の蓄積こそがさらなる有を生む。その前提のもとに「芸のこやし」や「精進」という発想・価値観も生まれた。ところが量子論においては「別にふだん精進しなくても(無でも)いつかいい作品がポッと描けるよ」という思考につながりかねないのである。何ともアナーキーである。私のような怠け者にとっては悪魔的に魅惑的な考え方ではあるが、このあたりは自戒を込めて十分に気を付けねばなるまい。量子論と作家の資質向上が相いれることはなさそうだ。

話がそれた。私は量子論の詳細は相変わらず理解できないが、神様のサイコロ的なこの宇宙誕生理論は感覚的には共感できる。素粒子と同じく人間だって生きている限り揺らぎ続け、運に左右され、確率論的に毎日を乗り越えている。家事に、仕事に、創作に、天候に、人間関係の狭間に、私たちは常に揺らぎながら生き続けている。揺り動かされるのは決して楽なことではないが、量子論に言わせればその揺らぎこそが何かを創造するエネルギーになるという発想にもつながる。普段の生活の中で経験する様々な感情的、感覚的な揺らぎこそが、あらたな創作へのビッグ・バンにつながる可能性があるということだ。

主体美術協会に多大な貢献をされ、個人的にも深く親交を結んできた中城芳裕氏が昨年急逝されたことは、私にとってはこれまでの人生の中でこの上なく大きな揺らぎとなった。それは今なお私の魂を揺さぶり続けている。中城氏の逝去は、50歳を過ぎた私を変えた。具体的に何をどう変えたのか?その証左はこれからの私の生き方と制作で示すしかないが、氏がいなくなった世界に残された私が表現への希求をより強く感じるようになったことは事実である。この大きな揺らぎを制作意欲に結びつけることが残された者の使命とも感じている。

最新の科学が示すように、本来無と有の境目はあいまいなものなのかもしれない。だとすれば中城氏はいま、無と有のあいだを揺らぎながら、時には遠い星雲の地平から、時には私たちのすぐそばから、実数世界に生きる私たちに向けて素敵なメッセージをポッと送り続けているに違いない。きっとユーモアと優しさを込めて。そう信じている。

「主体展 これまでの軌跡」

前編 創立～第30回展（1964年～1994年）まで
「主体美術協会小史」から抜粋

主体美術協会創立60周年を数年先に迎えるにあたり、これまでの歴史を一通り振り返って見てはいかがでしょうか。過去のさまざまな問題にどう立ち向かってきたかを知ることは大事です。昔に比べると、世代間の交流が少なくなってきました。この資料を元に語り合ってみませんか?

紙面の都合により、今回は第30回展までです。以降は来年夏の113号に掲載します。

事務局機関紙編集部／カット：中嶋　修

1964年　創立までの記録

8月3日
東京都鷺宮福蔵院にて会合。赤塚 徹、磯村敏之、岩織 治、上野 実、大野五郎、大村 連、賀川 孝、加藤 一、倉石 隆、小菅徳二、小谷博貞、小林良曹、金野宏治、塩水流功、末松正樹、塚谷政義、手塚益雄、寺田政明、渡ヶ敷唯信、豊田一男、中島保彦、中野　淳、西良三郎、西村保史郎、根岸　正、秀島 任、深見公道、松井 豊、森 芳雄、八鍬四郎、矢島甲子夫、柳沢安雄、吉井 忠、吉江新二（他四名、麻生三郎、糸園和三郎、羽田重亮、森田良三）の38名で自由美術家協会退会を決意。

8月5日
同志38名にて自由美術家協会退会を声明。退会声明書。「このたび私たちは、自由美術家協会を連名で退会いたしました。私たちが長年愛情を持ちつづけて来た自由美術家協会も、ここ数年の間に戦後果たしてきた使命も修了してしまい、ここでは更に可能性を高めることは、期待出来ないと考えた……」

8月20日
福蔵院にて今後の運営方針を検討、具体的運営に関して委員13名を選出

8月26日
運営委員会を開き、連絡事務所を中島保彦方とし、上記34名で新団体結成の呼びかけを行うことに決定。この時点で新たに参加した同志39名。荒木道夫、石川歌子、稲葉 実、奥冨 修、小野絵麻、尾内健治、川合喜二郎、金井信一、菊地長市、小谷良徳、小林邦二、佐藤吉彦、島田由紀子、鈴木国稔、関 晴明、関戸 伸、田中朝庸、田中彦次、司 修、土井 栄、戸津勇作、奈良清四郎、西山松久、橋本 章、羽原智達、浜田方一、濱 哲郎、古木茂雄、古山保子、細井憲摩、堀内菊二、前田孝造、松本忠義、宮崎照雄、森川ユキエ、八橋誠滋、山田光春、山本新蔵、脇坂憲治
準備責任者／中島保彦

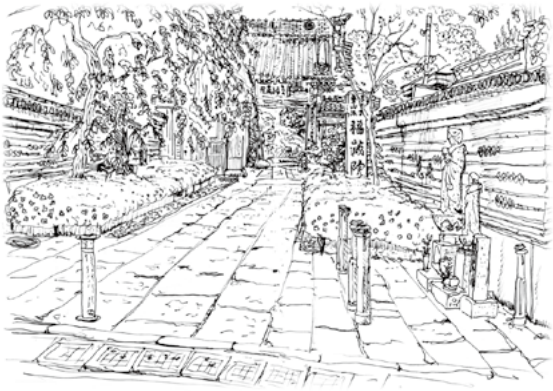
9月5日
新事務局責任者を吉江新二に決定。第1回展開催のための準備活動に入る。
事務局責任者／吉江新二

9月26日
井沢元一、奥井章夫、紺野修司、瀬高政良、中村輝行、平野 遼、前川博人、與志崎朗の8名参加。
- 会の趣旨及び会則を発表。
- 会名「主体美術協会」に決定。代表者　森 芳雄。
- 会出発当初、グループ展方式で質的に高い展覧会を続けていこうとする空気が強くあった。然し、現実には90人近い作家の発表の場として適当な会場を得ることは不可能に近いことから、結局は都美術館で公募展として再発足するしか術は無い———との結論に達し、都美術館獲得運動を展開していった。

代表者／森 芳雄

10月7日
主体美術協会発会レセプション（東京･厚生年金会館）。

12月3日
東京都美術館より正式に使用許可の通知を受ける。



▲1964年　東京・中野の福蔵院

◀主体美術命名

▲主体美術協会 印

2000年機関誌より抜粋
主体美術のマークは「炎」
井上俊郎

主体美術には創立当時から実印があって、その「主」という文字は先の尖った三角形であることを聞いていた。「文字の起源」という厚い本によると「主」の点の下に位置する「王」は油の燭台の形象であり「▲」は燃える炎の形象である。従って「主」は燭台の中で燈火の燃えている象形である。主人などの意として使われるのは、古くは火を支配するのが一家の中心的人物であったからであると説明してあった。

▲旧美術館

1965年　**第1回展**　6月6日～19日
・東京都美術館裏口から入場、2ブロックのスペースを使用して開催。
・美術団体無用論等があり美術関係ジャーナリストからは無視されたが、熱気あふれる第1回展となった。
責任者／吉江新二

1966年　**第2回展**　6月6日～19日
・この年より巡回展開催。名古屋展（愛知県美術館）7月、京都展（京都市美術館）7月、北九州展（八幡美術館）8月
・機関紙「主体美術」第1号発刊。
・主体美術第2回作品集発行。
・会員推挙は、'67.1、村松画廊に於ける会員展に佳作作家を招待出品し、そこで決定する方法を採った。
責任者／大村 連

1967年　**第3回展**　6月6日～19日
・巡回展開催。名古屋展6月26日～7月5日、京都展7月16日～7月24日、北九州展9月
・会員展　村松画廊
責任者／大村 連

1968年　**第4回展**　6月7日～19日
・主体美術展によせての会員デッサン集発刊
・会員展　村松画廊
責任者／大村 連

1969年　**第5回展**　6月7日～19日
・陳列作品に名札をつけず、番号のみによる表示方式を採用して、注目された。会友問題が提起され、主体美術の在り方及び体質をめぐり論議。
・この年より作品合評集を発刊。
・パンフレット「運動体としての主体美術をとらえる」をテーマとする。
責任者／川合喜二郎

1970年　**第6回展**　6月7日～19日
・総会に於いて、70年安保問題について会としての態度を討議する。
・パンフレット「矛盾体の領域」。批評集発刊。
責任者／磯村敏之

1971年　**第7回展**　6月7日～19日
・審査の枠にとらわれずに制作するとのことから、佳作作家の特典として、次年度一点無審査陳列の制度を、この年以後実施した。
・パンフレット「選択―逆行」のタイトルで「私の創作論」を扱った。
責任者／磯村敏之

1972年　**第8回展**　6月6日～19日
・美術ブームが起こり、主体美術釣り堀論争が出され、作家態度の危機がさけばれた。
・パンフレット「戦後美術の流れの中で」を特集する。
責任者／磯村敏之

1973年　**第9回展**　5月7日～20日
・東京都美術館新築移転に伴い、館当局より会期及び会場変更の通達があった。会場は彫刻室及び佐藤記念室を使用して開催。彫刻室を衝立で6ブロックに分け、記念室は佳作作家室とした。
・北九州展を、小倉の井筒屋に会場を変えて開催。
・パンフレット「今日の問題を探る」のテーマで、情報社会における個性の問題とその危機を訴えた。
責任者／岩織 治

1974年　**第10回展**　5月7日～20日
・巡回展三展のうち北九州展がこの年より中止となり、巡回展は名古屋と京都となった。
責任者／岩織 治

▲第1回展　旧美術館

▲第2回展作品集

▲第5回展パンフレット

▲1965年　美術館裏玄関

1993年機関誌より抜粋
「玉手箱」　渡ヶ敷唯信

上野と云えば公園、公園と云えば美術館、われわれにとって最も馴染深いものだ。あの高く広い石段を昇って、堂々たる円柱の立つ玄関は、欧州の多くの美術館に匹敵する位、威厳があり、また若画学生の憧憬と希望の扉が開かれていた。…官展と違って私たち野党は兎角貧乏たらしく、一年一度の展覧会の蓋明の祝賀会も今こそ上野一流の精養軒のシャンデリアの下、赤い絨毯の上で催しているが当時は板張り二階建ての韻松亭であった。

▲1974年頃　主体神奈川作家展

1975年　**第11回展**　9月1日～13日
・秋の第一陣に会期変更になる。新装なった美術館B1·F1を使用。
・パンフレット「主体美術の十年間」をまとめ、主体美術小史を編纂。
責任者／岩織　治

1976年　**第12回展**　9月1日～11日
・反日展を旗印として、日展と同一会期開催の東京展が秋の第二陣に移動。それに伴う混乱が生じ大問題となる。主体展も会期減少のやむなきに至った。
・この年より「主体美術展」の名称を「主体展」にあらためる。
・行動美術協会と合同で「作家にとって公募団体とは何か」の問題にとりくむ。
責任者／吉江新二

1977年　**第13回展**　9月1日～11日
・会期問題はこの歳まで尾を引いた。
・同時開催の3団体（院展、二科展、行動展）と同一会期にするために、要望及び署名活動を行う。美術関係者多数の賛同、協力を得たが、館側新方針に反対する団体との利害が一致せず紛糾する。
・安井賞展における商業主義的傾向について論議、会として推薦のあり方を検討した。
責任者／吉江新二

1978年　**第14回展**　9月7日～19日
・東京都美術館の新方針にもとづき会期変更。
・この年より版画作品の公募を専門の版画作家が会員側にいないとの理由から取りやめる。
・パンフレット「明治·大正·昭和生まれ三代の証言」を特集。
責任者／吉江新二

1979年　**第15回展**　9月7日～19日
・第15回記念展とする。
・各作家の青春譜を随筆集「出発」にまとめ、リトグラフ作品を挿入、フランス装B4判で発刊。
・機関紙「主体美術」休刊
・国際ロータリー創立75周年記念行事として、また国際児童年にちなみ主体辰野展（辰野ロータリークラブ主催）を辰野町郷土美術館で開催した。長野県南信地方中高生の団体鑑賞など、大きな反響を呼ぶ。
責任者／矢野利隆

1980年　**第16回展**　9月7日～19日
・機関紙復刊29号。
・パンフレット「創造への生命力」をテーマにリトグラフを挿入し発刊。
責任者／矢野利隆

1981年　**第17回展**　9月1日～13日
・東京展問題以来、3年ごとの借館割当て見直しの結果、秋の一陣の会期初日は9月1日に戻る。
責任者／矢野利隆

1982年　**第18回展**　9月1日～12日
・審査の合理化をはかるため、一審より入選作品を決定する審査に改める。
・初日に出品目録を発刊。
責任者／井上俊郎

1983年　**第19回展**　9月1日～13日
・機関紙35号よりB4判サイズをB5判に改める。
・第20回記念企画を検討、準備にかかる。
責任者／井上俊郎

1984年　**第20回展**　9月8日～20日
・会期変更。一週間後ろへずれて9月8日より開催。（21回展まで）
・創立20周年企画／物故作家遺作特別陳列（出品15名）／画集発刊
・巡回展／米子市立美術館にて開催　11月3日～12日
責任者／井上俊郎

▲第12回展　会場入口

▲第11回展パンフ

▲第16回展パンフ

▲新宿高校での会議

▲1985年　池袋モンパルナス展講演会にて（寺田氏、熊谷氏、吉井氏）

▲第21回展1985年　審査風景

1985年　**第21回展**　9月8日～20日
・作品集を発刊、会員と入選者の全作品を集録、以後毎年。
・作品合評会や懇談会に重点をおき、合評集は再検討のため休刊。
責任者／中村輝行

1986年　**第22回展**　9月1日～15日
・会期延長となり、他3団体と同一会期となる。
・パンフレット「主体美術」を復刊。サブタイトル「今日の状況と美術」
・総会で陳列委員16名選出。（2年選ばれた委員は1年休むことに）
・例会と併せてモデル･クロッキー会を3回もつ。
・主体美術のあり方についての諸問題を大野五郎、末松正樹、寺田政明、森芳雄、吉井忠の五氏を交えて拡大事務所会議を3月に開催。
責任者／中村輝行

1987年　**第23回展**　9月1日～16日
・デッサン会と研究会を定例化し、研究面では文化･社会などについて広く現代の創作営為に関連する問題の提起を試みた。
・3月31日、国家秘密法案に反対する声明文を出す。
・主体のあり方について、研究班A･Bグループを組織し、臨時総会（7月19日）にてディスカッションを行う。
・審査について方針変更（挙手よりも話し合いを主にし、作品本位で）
・陳列は16名の陳列委員に事務局員を加えて行う。
・パンフレットは「表現の自由」をサブタイトルとする。
責任者／中村輝行

1988年　**第24回展**　9月1日～16日
・陳列は総会で決定した陳列委員10名に事務局員を加えて行う。
・パンフレットは「作家の原点」を探る。（画家の思索と経験の軌跡①）
・都内高校美術部に招待状を送る。
責任者／赤塚 徹

1989年　**第25回展**　9月1日～16日
・陳列は総会で決定した陳列委員16名に事務局3名を加えて行う。
・パンフレットは「作家の原点」を探る。（画家の思索と経験の軌跡②）
責任者／赤塚 徹

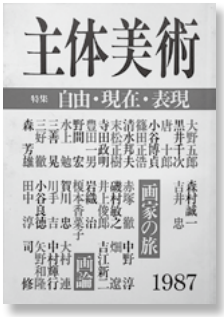
1990年　**第26回展**　9月1日～16日
・春季主体展開催　3/20～4/1　埼玉県立近代美術館
・陳列は総会で決定した陳列委員15名に事務局3名を加えて行う。
・パンフレット「作家の原点」を探る（画家の思索と経験の軌跡3）
責任者／赤塚 徹

1991年　**第27回展**　9月1日～16日
・1991春季主体展は中止決定。
・陳列は総会で決定した陳列委員16名に事務局1名を加えて行う。
・ポスター類の意匠変更（文字　大野五郎）
・パンフレットは各地域からの参加による編集会議を設ける。「画家のアクチュアリティ（今日性）と表現」をテーマとする。
責任者／金野宏治

1992年　**第28回展**　9月1日～16日
・陳列は総会で決定した陳列委員16名に事務局3名を加え行う。
・試みとして会員はB1、出品者はF1に陳列する。
・パンフレットのテーマは前年に引き続き「画家（主体）の今日性と表現」。
・新会員は8月31日の総会で決定することになる。
責任者／金野宏治

1993年　**第29回展**　9月1日～16日
・陳列は総会で決定した陳列委員16名、事務局3名でおこなう。
・28回に続き展に続き会員はB1、出品者はF1に陳列する。
・巡回展の名古屋展会場が新設愛知県美術館8Fに変更。
・パンフレットは「座標を《生活者》において」をテーマとする。
・審査について方針（挙手よりも話し合いを主にして行う）を再確認。
・「大グループ展問題」について2度の総会を開く。
責任者／金野宏治（9/16まで）　代行／浅野 修

▲第22回展パンフ



▲第23回展パンフ

機関誌「自由・現在・表現」特集から抜粋
「機密法と創造」　吉井　忠

この頃「国家機密法」が問題になっている。日本はスパイ天国だからそれを法律で規制しなければならぬという。世事にうとい私達美術家だが、戦前のことを知っている人々は、また来たなと思う。

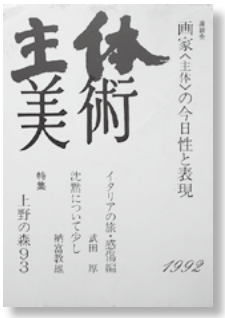
日本には平和憲法があり、広島、長崎の悲劇を二度と繰り返すまいという堅い決意がある。日本には守らなければならない機密はない筈だと元自衛隊長官も新聞に書いていた程だ。（中略）

近代美術の創造には余程しっかりした現状認識と哲学が基礎になっていなければならない。私達は西側の一員ではなく世界の一員であることを知り、そこから自由な眼で人間のことや美術のことを考えたいと思う。

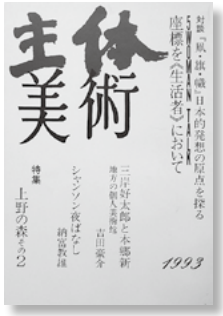
◀第23回展　林氏講演会

▲第24回展パンフ

▲第26回展パンフ



▲第28回展パンフ



▲第29回展パンフ

1994年　**第30回展**　9月1日～16日

創立30年記念展とする。
陳列は陳列委員15名、事務局3名でおこなう。
陳列委員は2年おこなったら2年休むことに改定。
会員と出品者の分離展示
創立30年記念誌「主体美術の30年」発行。
機関紙57号において、「大グループ展問題」の詳細報告と主体美術の精神についてを特集。
討論会を中心とした研究会を継続的に行う、テーマ「作家として21世紀をいかに意識するか（主体美術の今後のあり方を探る）」
京都展は遷都祭行事のため、今年に限って12月に開催。
責任者／浅野 修

◀第29回展　総会

◀1966年　機関紙「主体美術」第1号

▲創立30年記念誌

機関紙57号においても「大グループ展問題」の詳細報告と主体美術の精神について特集を組む

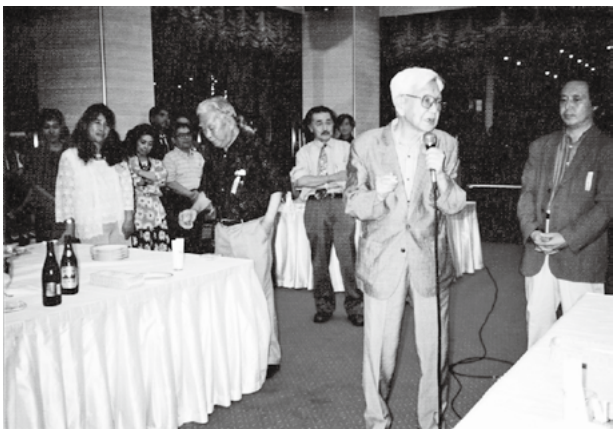
「主体美術は、作家個々の主体性を重んじ思考、信条はもとより、創作･発表の自由は保障されているものである。
　主体美術の精神は、共通認識として権威主義を排し、いわゆる派閥勢力台頭に対しては、特に自制と自浄作用が発動するものとする」

—1994年　機関紙57号より

◀1974年　機関紙「主体美術」第10回展特集号

◀1985年　機関紙「主体美術」創立20周年記念特集号

◀1996年　機関紙「主体美術」第60号



◀1994年　第30回展懇親会（上野精養軒にて）

前編の終わりに

　今回の特集の元になったのは、図録の巻末に掲載されている「主体美術協会小史」です。図版や写真は50周年記念誌から流用しています。なんとなく眺めているだけでは、ピンとこないかもしれませんが、主体の歴史も世界情勢と無縁ではなく、時代とともに作品のテーマも変われば、パンフレットの内容も移り変わります。自分の尊敬する作家が何を語っていたか、どんな作品を作っていたか、知りたくなった人は事務局へお問い合わせください。
　60周年に向けて、こういった主体の出版物などをアーカイブする計画を今検討しています。貴重な資料をお持ちの方は、ぜひご協力をお願いいたします。　（事務局編集部）

創立会員へのインタビュー記事

佐藤 善勇

私が主体美術の機関紙を担当したのは、1994年から1996年まで、事務局出版に在籍している期間の3年間だった。当時のことを思い出すと、前任者から引き継いだ時心配したのは、果たして私にできるだろうかという危惧だった。私なりの機関紙づくりをしなければならない。

まず、1面に会員のカットを入れたい。磯村敏之さんに頼んだら、「武甲山」のカットが送られてきた。紙面も従来のものに何か新しい特集的なものが欲しく、思い立ったのが創立会員のインタビュー記事。大野五郎さん、吉井 忠さん、森 芳雄さんの3名を候補にあげ、その段取りをした。会員になり、私にとっては出品以外の初めての大仕事で緊張した。

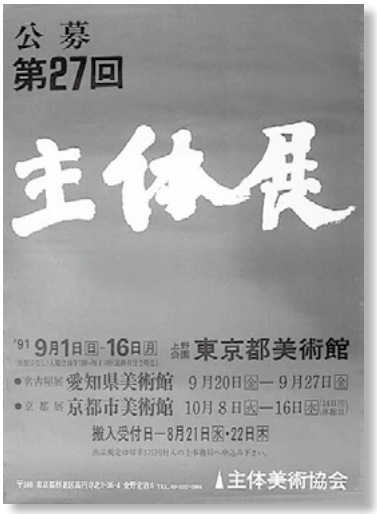
私は録音用のカセットデッキと書き取りノートを持って創立会員を訪ねた。インタビュー内容は、戦争体験、生活やご自身の制作への思い、主体美術への希望などだったと思う。2時間から3時間ぐらいかかったろうか、貴重なお話を聞き逃すまいとメモし、デッキを確認しながら進めた。森さんの時は、事務局責任者の浅野さんに同行してもらった。創立会員のお話を再現するため、順を追い、忠実に文字にしていったのを思い出す。

機関紙担当は企画や発行に向けて全て自分一人でやったので苦労も多かったが、完成した時の喜びはなんとも言えない満足感があった。機関紙は事務局と会員の連絡網であると同時に、主体美術の歴史を刻んだ重要な存在である。

“出版”に入ってすぐ、ポスターの意匠変更の話が出て、大野五郎さんに文字がきの依頼にいったのが私である。後日毛筆で立派な「主体美術」の文字が完成した。その文字を使用したポスターが、その後何年も使用される。機関紙とは直接関係ないが、懐かしい思い出だ。

▲1994年　機関紙「主体美術」第57号

▲1995年　ホテルの部屋で酔い踊る３人（磯村氏、佐藤氏、大野氏）



◀1991年 第27回主体展ポスター　揮毫は大野氏

アトリエ訪問 vol.9

『故 中城 芳裕さん』
―横浜のご自宅を訪ねて

神奈川県横浜市

取 材／大西佐頼・金沢綾子
文・図／大西佐頼

◀「2つの岬・花火の後」（1993年 F200）

昨年急逝された中城芳裕氏は長年教員として勤務していました。いわゆるアトリエというものをお持ちではなく、学校の美術準備室やご自宅のリビングで制作されていました。

新卒で赴任して初めて担任を持った時の中学校一年生で卒業生の金沢綾子さんにご協力いただき、3月某日、大西と二人で中城家を訪ねました。

海にほど近い本牧のご自宅に伺うと、奥様の和乃さんが迎えてくださいました。広いリビングの正面に大きな窓が広がり、横浜の町並みが一望できます。食卓のある一角に、130号の「2つの岬・花火の後」が掛かっていました。

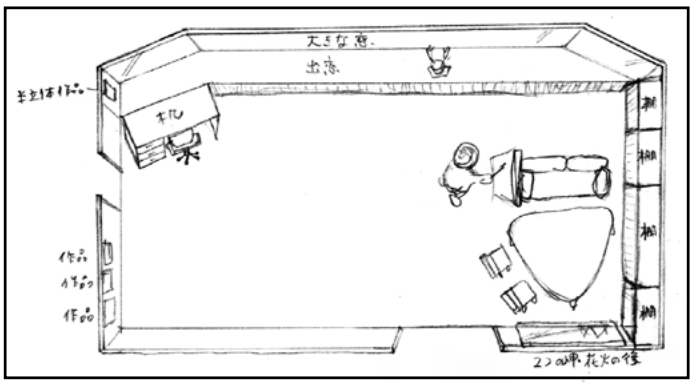
――この絵の中の男性は中城先生ではないですよね?

和乃さん／おそらくこれは中城のお父さんを描いていると思います。顔やたたずまいもお父さんのほうに似ているんです。中城のお父さんは船乗りで、細身ですが筋骨隆々とした方でした。他の絵で、力こぶに子供たちがぶら下がっている絵もありますが、あれもおそらくお父さんを描いていると思います。

余談ですが、中城が幼いころはお父さんは外国航路の乗組員で、一度航海に出ると1年帰ってこないので、思うように話したり遊んだりしてもらえるような環境ではありませんでした。それで、自分が父親になった時には、特に幼い息子たちとはたくさん遊んであげたいという思いを強く持っていたようです。実際に、文字通りの子煩悩で、子供と一緒になって全力で遊んでいました。

この絵に限らず、中城の家族像は、実際にあったことを脚色して、記憶の中のイメージを組み合わせて描いていると思います。この絵や雪遊びの絵など、似たようなシチュエーションは確かにありましたが、そのままこの通りではないんです。うちの家族と同じで夫婦と男の子二人が描かれている家族像が多いのですが、おそらく中城が子供の立場で、自分と兄と父母の家族のイメージも重ね合わせているのだと思います。

中城が育った家も男の子二人の兄弟でしたが、当時12歳のお兄さんが中城の目の前で亡くなってしまう事故があり、生涯心のどこかが欠けたまま埋められないような思いを抱いていたようです。男の子二人がそろっているというのは、中城にとって幸せのイメージとして欠かせないものだったのだと思います。



――中城先生はこのリビングで絵を描いていたのですね。

和乃さん／本当に気の毒だったと思うのですが、あれだけの絵を描いていた中城に、生涯アトリエを持たせてやることができませんでした。勤務している学校の美術準備室や自宅のリビングで描いていました。夏の主体展に出すような大きな絵は美術準備室で、個展の前などは自宅のリビングで小品の制作をしていました。自宅では、椅子に座って小さな作品を描いていることもありましたし、20号～30号くらいのキャンバスをソファの側面に立てかけて、床に座って描いたりしていました。

――ご家族がいるところで描いていたのですね。

和乃さん／子供がうんと小さい頃は、家族のことを優先して、家で描くことはありませんでした。それなりに大きくなってからは家でも描いていましたが、一度も、あっちへ行ってくれなどと言われたことはありません。それぞれ子供たちも同じ部屋の中に散らばって好きなことをして遊んでいたので、大きな子供がもう一人いて中城は絵を描いているというような感じですね。生意気盛りの息子たちに描きかけの絵を見せて、友達同士みたいに「この絵どうかな?」と聞いたりしていました。

――中学校の美術準備室も、悩める生徒のたまり場のようになっていました。先生が授業や職員会議を終えて帰ってきたら、本を読んでいる子がいたり、待ち構えていてヘビーな相談をもちかける子がいたりしました。君たち早く帰りなさいよ、とは言っても、追い出しはしなかったですね。美術準備室で絵が少しずつ出来上がっていくのを、多くの生徒が見ていました。

和乃さん／中城の場合、アトリエとは場所ではなくパフォーマンスだったのかもしれないですね。何を着ているかも美術教師は大事なんだ、とも言っていました。中城の教師としての最大の教えは自分が描いている姿を見せることだったかもしれません。

――森芳雄氏は何かにつけて（絵と関係ないようなことでも）「デッサンがなっていない」と言っていた、画面に向かっている時だけが絵を描いているのではない、と私たちにも言っていました。今日お話を伺って、生涯そういう生き方を通していたのだと確信しました。本日はお忙しいなかご協力ありがとうございました。

第57回主体展　企画展示

『私の仕事 いま・むかし』

第57回主体展では特別展示として「私の仕事 いま・むかし」を企画します。

かつて第38回展(2002)から第41回展(2005)にかけて、主体展では東京都美術館の講堂で研究シンポジウム「私の仕事 今、昔」を行いました。4年間で延べ7人の会員が登場し、スクリーンに過去から現在に至る自作の画像を映しながら、表現の変遷や作品にかける思いを語っていただきました。

そのコンセプトを装いも新たに、今年は企画展示として一室を設けて展観します。創立時から23回展までの会員の中から17名の現会員に、今年の新作に加えてできるだけ旧い時代の作品も併せて並べて頂きます。1960年代から2000年頃までの旧作と現在の作品を並列して見ることで、長い年月の間に作家として変わった部分と変わらない部分が自ずと見えてくるのではないか…二枚の絵の間の長い時間と作家の表現の深化に想いを馳せるのも興味深いのではないでしょうか。

主体展と共に歩んだ個々の作家の足跡を振り返りながら、同時に主体展における作家の「個」と「集団」の未来を展望する試みとしたいと思います。

（展覧会委員／迓町勝治、藤田俊哉）

企画展示「私の仕事 いま・むかし」出品予定作家（敬称略）

浅野　修	迓町　勝治	中島　佳子	森田　六男
岩見　健二	種倉　紀昭	中村　輝行	矢野　利隆
榎本香菜子	筑波　進	福田　玲子	
小菅　光夫	手塚　國彦	保坂　淳	
佐藤　善勇	中川奈哥子	水村喜一郎	

惜別　「我が心の友、画家 小野 昭を想う」

保坂　淳

▲1997年個展会場にて（小野 昭 画集より）

小野 昭 氏 略歴

1937年　愛知県新城市生まれ
1961年　愛知学芸大学美術科卒業
1962年　東京都葛飾区立上平井中学校教諭
1963年　第27回自由美術展に入選
1964年　第17回アンデパンダン展に出品
1965年　銀芳堂画廊（銀座）にて第1回個展（以降個展多数）
1966年　第2回主体展に入選（以降毎年出品）
1969年　ヨーロッパを取材旅行
1974年　第10回主体展にて佳作作家
1975年　第11回主体展にて佳作作家、会員推挙
1989年　第1回主体ちば15展に出品（以降毎年出品）
2022年　逝去
主体美術協会会員
千葉県美術会理事
八千代市芸術文化協会会員

◀「黄金花」1966年第2回主体展出品

▶2021年第56回主体展「家路」F100

「小野さんと連絡がつかないんだよ。保坂さん何か知ってる?」

事務局の齋藤氏から電話があったのは4月初めでした。小野さんとは京成沿線駅隣り組で、7歳年上のなんでも相談できる兄貴のような存在でした。絵を描くことしか興味のない人で、「描くために生きる。生きるために描く。」という絵一筋の強靭な精神を持ち合わせた人でした。彫刻出身で絵は風景画が得意でした。とにかく描くのが早く、自分が気に入ればどこでも絵にしてしまいました。

私が主催している『房総を描く写生会』（一泊二日）に毎年講師として参加していただきました。2日間で油彩（F6～8）4点、スケッチブック1冊を仕上げてしまうエネルギーには感心してしまいました。

3月末に亡くなられたとのこと、残念です。残した作品は優に1000点は超えているでしょう。氏のことだから、天国に召されても絵筆を離さず、我々を見守っていることでしょう。

合掌

令和4年6月27日　記

各地の美術館から

東北へのまなざし1930−1945

福島県立美術館　6月4日〜7月10日

山田　礼二（福島県）

東日本大震災以降、東北地方の文化や風習がさまざまなところで注目を浴びるようになった。福島県立美術館で開催された「東北へのまなざし1930−1945」展は、戦争の色が濃くなりつつある時代から終戦の1945年までの15年間、東北地方を訪れた者の視点と、東北出身であらためて故郷を見つめ直した者の視点が紹介されている。

本展は6章で構成されており、第1章は母国ドイツから来日した建築家ブルーノ・タウトが見た「東北」を展示している。タウトはわずか3年間しか日本に滞在しなかったが、仙台に設立された商工省工芸指導所での技術指導をしながらも、3回にわたって東北を旅した。国内では辺境と見られていた東北地方が、タウトの眼には豊かな文化と生活様式を持った地域だと映り、現地の人々との交流を通して、温かいまなざしを向け、記録した。

2章は国内の研究者から見たまなざし。「民藝」の提唱者である柳宗悦や染織家・芹沢銈介は、民衆が日々の生活で用いる道具の美しさに目をむけ、東北の工芸品を高く評価した。蓑や背中当て、陶器などを展示。

続く3章は郷土玩具の世界。昭和初期の旅行ブームで、郷土玩具を収集、研究する大人たちが現れた。中でも「東北伝統こけし」と呼ばれる地域独自の特徴を持つこけしの一群は11の「系統」に分かれ、代々伝統を受け継いできた。平成に入って第三次こけしブームが起こり、「こけし女子」「こけ女」なるものが出現している。

4章と5章は、「積雪地方農村経済調査所（雪調）」に関わったフランスのデザイナーであるシャルロット・ペリアンや、民家研究の第一人者で「考現学」の提唱者としても知られる今和次郎らの活動を紹介する。

最後の6章で登場するのは、東北の生活文化を探求するため、農山村や漁村を訪れ数多くの作品を残した吉井忠である。1943年には東北生活美術研究会を発足した。

吉井さんの人となりは、主体の過去の記録や作品を通して理解していたにとどまる。直接話したこともなく、福島県出身というだけで勝手に親近感を持っていた私としては、この展示が示した戦前・戦中の吉井忠像を、あらためて身近な存在にしてくれた。同時に、故郷の東北を当時どのように見つめていたのか、俄然興味を持った。作品は『鋤踏み』や『裏磐梯』などの油彩数点と、東北各地の農村風景のスケッチ数十点。今回この展覧会を取り上げたのも、吉井さんの戦前の作品が展示されると知り、ぜひこれを紹介したいと思ったからである。

地元の人たちが気づかない、何気ない生活様式の美は、研究者の外からの眼と東北出身者の内からの眼を通して表舞台に出された。新しいものに目を向けるばかりでなく、身近な物の美しさを私たちはもう一度見直してみるべきではないだろうか。

この展覧会は、盛岡、福島の次に、東京ステーションギャラリーでも開催（7月23日〜9月25日）される。規模は縮小されそうだが、本展会期中でもあるのでぜひご覧いただきたい。

各地の美術館から

末松正樹(ダンス,ダンス,ダンス)

埼玉県立近代美術館　2月12日〜4月24日

返町　勝治（東京都）

埼玉県立近代美術館で2月12日から4月24日にかけて末松正樹さんの展覧会が開催されました。会期の後半4月5日〜10日に地下展示室で主体美術武蔵野作家展が開催されましたので合せて御覧になられた方もおられると思います。

終戦前後に制作された試行錯誤を繰り返したと思われる多くのドローイングの他、油彩作品が展示され、独立した映像室では部屋の壁一面にダンスの動画が投影されていました。

全身白タイツのダンサーが次々と右袖から現れ、ゆったりとした群舞を行いながら左袖に消えていく映像はやや甘いピントと相まって幻想的な雰囲気を漂わせていました。

末松さんは明治41年（1908）新潟県で生まれますが、陸軍士官の父の転勤に伴い秋田や朝鮮半島、宮崎などの各地を巡り山口高校在学中の19歳の時に観たドイツ映画「聖山」で当時舞踏家としても活躍していたレニ・リーフェンシュタールの踊りに感動し、これがドイツの前衛舞踏ノイエ・タンツとの出会いで後の人生に大きな影響を及ぼすことになりました。25歳で上京しノイエ・タンツのスタジオに通い熱心にダンスに打込み、31歳になった1939年にはパリでの日本舞踏展覧会公演で渡仏という転機を迎えました。公演終了後ドイツに渡ろうとしましたが独仏開戦という時代の波に飲み込まれて果たせず、戦火に追われて中立国スペインへの脱出を試みますが、国境手前のペルピニャンで敵性国人として逮捕され抑留生活を余儀なくされました。自由を奪われ先の見えない不安の中で支えになったのは、支給された紙と鉛筆による日々のデッサンでした。

「無性に絵の中で舞踏がしたかった」という言葉のとおり、踊る群像が繰り返し現れ、ダンスで培われたリズム感やダイナミズムが表現されています。終戦後1946年3月に復員船で帰国を果たした後、パリで半年ほど同じアパートで過ごした井上長三郎と偶然銀座で出会い、その後誘われて自由美術家協会に参加し、会員となりました。

▲末松正樹　オテル・ド・ラ・ペで描いた自画像

この頃SEF（フランス映画輸出組合）に文芸部長大岡昇平の後任として入社し、フランス映画の選択と日本語字幕の作成に従事しました。ジャン・コクトー作品の殆どを手掛けた他、直訳すれば「楽園（パラダイス）の子供たち」となる映画のパラダイスが芝居小屋の一番高い場所にある桟敷の事で適当な訳語がなく、苦しんだ末に「天井桟敷」という言葉を創り出し、日本での封切り時には「天井桟敷の人々」という邦題になりました。後に寺山修司が1967年に劇団「天井桟敷」を結成しました。

1953年には多摩美術大学の教授となり後進の育成にあたりながら1964年自由美術家協会を退会して主体美術協会の結成に参加しました。

美術館内の別会場では企画展「扉は開いているか」で埼玉県浦和市ゆかりの作家として、フォト・デッサンで知られる瑛九の展示が行われていて、生涯の友人である主体展創立会員の山田光春さんのデッサンも展示されていました。末松さんと瑛九は遠縁にあたるそうで偶然とはいえ不思議な縁を感じました。

フォト・エッセイ

秘密の花園

瀧安　順子（広島県）

▲裏手の3坪の庭

▲通りに面した庭

我が家には小さな庭が二つある。

一つは通りに面した庭。行きかう人に少しでも楽しんでもらえたらと、バラやノウゼンカズラなど一年を通して花を絶やさない様に開花時期や色彩を意識して手入れしている。

もう一つは我が家の裏手にある3坪ほどの庭である。古い借家や隣家の壁に三方囲まれているため半日陰で、しかも我が家の部屋や窓からその庭を眺めることができない位置にある。以前は荒れ放題だったのだが、10年間少しずつ手を入れ花や低木を増やしてきた。今では10種類以上の紫陽花、水仙、椿、彼岸花、山椒、ユリ、カキツバタなどが所狭しと植えられ、この環境に生き延びた植物が根付き、野趣あふれる庭に成長した。

花木のお陰で、また人気の無いひっそりとした場所のせいか、春には蝶が舞い、蜂が飛び、夏はセミが鳴き、秋には鳥が実をつつきに来てくれるようになった。トカゲやバッタ、てんとう虫、羽黒トンボにもお目にかかれることがある。一度だけへびに遭遇し、思いがけないサプライズに腰が抜けそうになったこともある。

紫陽花はプレゼントなどで頂いた小さな鉢を地植えにしたり、挿し木で増やしてきた。椿は、友人と山に出かけた時に落ちていた種を植えて大きくしている。水仙やカキツバタは知人の庭に咲いていた花の株を分けてもらった。彼岸花は植えた記憶がない。

要するに寄せ集めの作為のない気楽な庭なのである。私以外足を踏み入れることがないこの庭を人知れず『秘密の花園』と呼んでいる。

生きている以上、人は大きな壁にぶちあたったり、小さな石ころにさえつまずくものである。時に希望を失くし、悲しんだり、行き詰まったり、くさったり、引きずったりする。そんな時この『秘密の花園』に足を踏み入れる。

7月頃に庭に来る羽黒トンボは亡き人が姿を変えてやって来るという言い伝えを読んだことがあるが、静かに庭を見ていると見送った人を思い浮かべる。

この3坪ほどの小宇宙は私にとって不思議な力がひそんでいる様に思われ、佇んでいると私の全てを包み込み静かに優しく受け止めてくれるありがたい庭なのである。ただ心の赴くままに花を楽しみ、植物の成長を喜び、生き物に触れあっているうちに、取り乱れた心は落ち着き、自分を取り戻し、心に余裕が生まれ、あまり深刻にならずに朝を迎える事が出来ている。

この庭に癒され、助けられ、励まされてきた。

―よく考えると何だか私のアトリエに似ているな～―

コロナ禍で行動が制限される中、雄大な大自然にはまだまだ自由に行けそうにないが、直ぐそばにある3坪ほどの自然を楽しんでいる。決して人にお見せできる様な立派な庭ではないが、今日も『秘密の花園』に足が向く。

フォト・エッセイ

新米担任の苦悩と万年筆

大口　　満（新潟県）

新潟大学を卒業後、県内の公立と私立の学校で非常勤や常勤講師を続けていましたが、縁あって私立高校に美術教師として正式採用されたのは31歳の時。すでに息子が二人いて経済的には安堵しましたが、予想を超える困難が待ち受けていました。

晴れて初担任となった2年生のクラスには問題を抱える子たちがひしめいていたのです。妊娠していたM子さんはすぐに自主退学。素行不良で中学生浪人の末に入学してきた丸田君はやくざのようにすごむこともあって、教務室に呼ぼうとしたらいつの間にか屋上の『タイマン』へと。暴走族『上越連合』隊長の下田君はよくパトカーに追いかけられて大ケガ。同じく暴走族の浜口君は掃除をさぼって帰るのを引き留めた私の手を振り払った際に、私のメガネをこわしましたけれど「メガネスーパーに行けばタダだよ」。さらに暴走族の大島君はぞんざいな掃除のしかたで注意されたことに逆切れして、私の顎にパンチを。彼らにとって暴力は日常茶飯事。通りかかった女性教師が「教師に暴力をふるって退学にならないのですか」と尋ねましたけれど「考えたこともありません」と。

つまり担任初体験の新米教師にとっては無我夢中。とても手に負える相手ではなくて情けない限りですけれど、普通のよい子もいますし、いじめられている男子もいます。とにかくまだ始まったばかり。ダメ教師なりに少しは良いクラスにしようともがきながら打開の道を探していたのです。

このころ主体展に出品して、落選したことも入選したことも。精神的には絵どころではなく、制作期間は夏休みの2週間が勝負。それでも初入選で喜ぶ私は同郷の故倉石隆さんに会場で批評を請うと「よく見たけど良いところがひとつもないなー。説明的な色合いだからセザンヌを勉強したほうがいいですよ」。またある時、故植田寛治さんからは「これだけデッサンが狂っているってことは、学校の教師みたいだけど教科は何?」と尋ねられたことも。まいりました。

ところで、ダメ教師ながら生徒のためにクラス独自の朝学習とか、がんばる子をほめる学級通信とか、いじめられている子といじめっ子の双方を家庭訪問しながら謝罪の場を設けるとか色んな実践をやりながら、その後一人も欠けることなく彼らは卒業していきました。8回の停学処分を受けた下田君も。

それから30年近くが過ぎて定年退職を迎えたある日、暴走族隊長の下田君が車でわが家にやってきたのです。「大口先生、退職祝いの準備ができています。みんなが待っています。乗ってください」。「暴走しないよな」と尋ねる私に、「大丈夫です。安全運転で行きますから。先生へのプレゼントは、いつも手書きの学級通信を出してくれた先生への感謝を込めて万年筆にしました」。

展覧会記録

2022年1月末～2022年8月

■色の美学・形の詩学 PART9
(柏木喜久子 他)
1月31日～2月5日
ギャルリー志門 (銀座6)

■長沢 晋一展
1月31日～2月5日
あらかわ画廊(銀座1)

■第6回M-art '79展 (山﨑弘 他)
1月31日～2月5日
画廊宮坂(銀座7)

■水村喜一郎油絵展
1月31日～2月6日
ギャルリー・コパンダール(京橋2)

■柿崎 覚油絵展
2月9日～2月15日
小田急百貨店新宿店本館10階美術画廊(新宿)

■末松正樹(ダンス,ダンス,ダンス)2021
2月12日～4月24日
埼玉県立近代美術館(さいたま市)

■第19回冬期ミニチュア100人展
(伊藤明美、柴田かよ子、水谷幸子、水野博子 他)
2月15日～2月27日
ギャラリー名芳(名古屋市)

■闇展(小林宏至 他)
2月21日～2月27日
あかね画廊(銀座4)

■前田 博 花の絵展
3月1日～3月31日
コーヒー&ギャラリーなごみの樹(長野県)

■ひぐらし展「主体美術協会奄美作家展」(有馬久二、返町勝治、寺田政明、畠理弘、水村喜一郎 他)
3月3日～3月15日
田中一村記念美術館企画展示室(鹿児島県奄美市)

■視点<鼎の眼>展(山本靖久 他)
3月7日～3月13日
あかね画廊(銀座4)

■第55回記念 主体美術中部作家展
3月8日～3月13日
愛知芸術文化センター(名古屋市)

■第54回主体美術神奈川作家展
3月8日～3月14日
横浜市民ギャラリー(横浜市)

■第12回輪展(長沢晋一 他)
3月14日～3月19日
銀座 K's Gallery(銀座1)

■倉石 隆の「新旧コレクション展」
3月15日～12月15日
樹下美術館(新潟県上越市)

■主体美術協会奄美作家展「8人のモノトーン」(畠 理弘 他)
3月19日～3月30日
田中一村記念美術館企画展示室(鹿児島県奄美市)

■中城芳裕個展
3月21日～3月27日
あかね画廊(銀座4)

■第5回弥生の空に
(井上樹里、山本靖久 他)
3月21日～4月2日
始弘画廊(南青山5)

■Women'sWorks一女の仕事展11th
(柴田かよ子、水谷幸子、水野博子)
3月23日～3月27日
愛知県美術館ギャラリー(名古屋市)

■自由律の俳人 尾崎放哉との対峙 12名による絵画展(齋藤典久 他)
3月27日～4月2日
ゆう画廊(銀座3)

■大口 満絵画展(油彩・水彩)
～自然との対話～
3月27日～4月3日
大島画廊2階(新潟県上越市)

■續橋 守小品展
3月29日～4月3日
ギャラリー苑(神奈川県中郡)

■宮林さわ子絵画展
一今を生きる・ひとかたち一
3月29日～4月3日
豊橋市美術博物館第一展示室

■水村喜一郎展
4月1日～11月30日
水村喜一郎美術館(長野県東御市)

■第50回記念主体美術武蔵野作家展
4月5日～4月10日
埼玉県立近代美術館(さいたま市)

■第27回時のかたち展
(中嶋修、結城智子 他)
4月5日～4月11日
横浜赤レンガ倉庫1号館2階

■東北へのまなざし1930-1945
(吉井忠 他)
4月9日～5月15日 岩手県立美術館
6月4日～7月10日 福島県立美術館
7月23日～9月25
東京ステーションギャラリー

■榎本香菜子展
一ミツバチの羽音は聞こえるか一
4月12日～4月17日
ぎゃらりい たねから(渋谷区)

■おきたま若手作家展SUBACO 2022進化する美術展(伊藤博昭 他)
4月13日～4月24日
よねざわ市民ギャラリー (米沢市)

■大野五郎作品展
4月16日～11月6日
北区飛鳥山博物館アートギャラリー

■Monochrome 白と黒の世界
(長沢晋一他)
4月18日～4月23日
ギャルリー志門(銀座6)

■伴 幸治個展
4月25日～4月30日
新井画廊(銀座7)

■主体ちば作家展2022
4月25日～5月1日
船橋市民ギャラリー(船橋市)

■IKIMONO2022 愛しき地球 一ほし一の生命体(オノ・ミチ・ヒロ 他)
4月29日～5月5日
ギャラリーMOS(三重県松阪市)

■井上長三郎・寺田政明・古沢岩美の時代
4月29日～6月5日
板橋区立美術館(板橋区赤塚)

■メルヴェイユ展vol.15(小林宏至 他)
5月6日～5月21日
ギャラリーアルトン(南青山5)

■Land scape(長沢晋一 他)
5月10日～5月15日
川口市立アートギャラリー・アトリア

■'22主体関西作家展
5月10日～15日　京都府立文化芸術会館
6月2日～7日　　アートホール神戸

■KIZUNA 2022-gallery select 油彩作家作品展
(榎本香菜子、柏木喜久子 他)
part1　5月23日～5月28日
part2　5月30日～6月4日
スルガ台画廊(銀座6)

■2022 CAF.N金沢展(長沢晋一 他)
5月31日～6月5日
金沢21世紀美術館市民ギャラリーB

■大田区在住作家美術展第6回初夏の小品展(井上樹里、山﨑弘 他)
6月1日～6月5月
大田区民プラザ展示室(大田区下丸子)

■ふじイメージ展(小野由紀子 他)
6月2日～6月14日
ギャラリーえざき(静岡市)

■小さな花店(井上樹里 他)
高輪画廊(銀座8)
6月6日～6月17日

■山﨑 弘展
6月7日～6月12日
銀座アートホール(銀座8)

■奏彩II 7つの視点(山本靖久 他)
6月8日～6月13日
横浜高島屋7階美術画廊(横浜市)

■アート'95展(荒木篤子 他)
6月11日～6月18日
たましんRISURUホール地階展示室

■11の指標展(長沢晋一 他)
6月21日～6月26日
中和ギャラリー(日本橋)

■小林宏至油絵展
6月23日～6月29日
渋谷東急本店8階美術画廊(渋谷区)

■キリスト教美術展2022(續橋 守、細矢恵美子、山﨑 弘 他)
6月23日～7月5日
銀座教会 東京福音会センター(銀座4)

■第29回心に響く小品展
(藤田俊哉 他)
6月28日～7月10日
ギャラリーヒルゲート(京都市)

■第42回グループ風二人展
(塚本照子、田中和枝 他)
7月2日～7月30日
愛知県豊田福祉センター(豊田市)

■第12回千葉県水彩会展
(保坂 淳 他)
7月5日～7月10日
千葉県立美術館第4室(千葉市)

■アートフォーラム三重アートバザール セレクション2022(オノ・ミチ・ヒロ 他)
7月6日～7月10日
三重画廊(三重県津市)

■TheNude-人体の神秘-(小林宏至 他)
7月7日～7月13日
Artglorieux gallery of TOKYO(銀座6 GINZA SIX 5F)

■アナザーサイド展(榎本香菜子 他)
7月16日～7月26日
PôRtoLibRE(ポルトリブレ)(高円寺南)

■第8回スーニン展(北村奈美 他)
7月17日～8月7日
美練TARATARA(横浜市)

■「巨大じゃがいもアート」「世界の150ヵ国の子供アート」(浅野 修)
7月19日～9月25日
8月14日 Eテレ『日曜美術館』にて放映
巨大じゃがいもアート館(北海道芽室町)

■clair-obscur
(井上樹里、小林宏至 他)
7月20日～7月30日
高輪画廊(銀座8)

■水辺のアリア(桑原雄一 他)
7月25日～7月30日
Bian-美庵(新橋5)

■竹越夏子 Moment rose
7月26日～8月7日
MEDEL GALLERY SHU 愛でるギャラリー祝(帝国ホテルプラザ2F)

■第54回主体美術秋田作家展
7月28日～7月31日
アトリオン秋田総合生活文化会館・美術館(秋田市)

■ドナルド・キーンと画家・井澤元一
8月6日～10月2日
京都文化博物館(京都市)

■ふるさと上越 主体美術協会の人々展
(大口 満、賀川 孝、倉石 隆、篠原真知子、関谷昌夫、筑波 進、舟見倹二、矢野利隆、涌井和子)
8月11日～9月20日
樹下美術館(新潟県上越市)

■第37回 日本の海洋画展
(佐藤善勇、手塚國彦 他)
8月16日～8月20日
東京芸術劇場(豊島区)

※ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DMを**事務局 研究部 小林** までお送りください。その情報は機関紙にも反映されます。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

機関紙『主体美術111号』制作スタッフ

■事務局作業者
齋藤　典久(責任者)
山田　礼二(機関紙部)
大西　佐頼(機関紙部)
黒川　　洋(会計)

■執筆者
藤本　　卓　返町　勝治
山田　礼二　保坂　　淳
佐藤　善勇　瀧安　順子
大西　佐頼　大口　　満
藤田　俊哉

■校正
返町　勝治
小林　宏至
井上　樹里

■カット
中城　芳裕(巻頭)
中嶋　　修(特集)

2022年度事務局体制

■責任者／齋藤典久　■会計／黒川　洋
■展覧会／山﨑　弘・藤本　卓
■研　究／小林宏至(DM受付担当)・上野信彦・井上樹里(ホームページ)
■広　報／【図録・出版】北村奈美・前山陽子【機関紙】山田礼二・大西佐頼
【発送】落合梨乃 【広告】新野安紀子
◆巡回展／京都：森　慎司　名古屋：伊藤明美

2022年 第57回主体展　日程

本　　展／東京都美術館(上野公園)
2022年9月1日(木)～9月17日(土)16日間(5日は休館)
公募搬入／2022年8月22日(月)・23日(火)
東京都美術館地下3階
京 都 展／京都市京セラ美術館本館2階南
2022年9月27日(火)～10月2日(日)
名古屋展／愛知県美術館8F
2022年10月18日(火)～10月23日(日)

ウクライナへの人道支援にご協力ください。

震災遺児進学の支援をしている「みちのく未来基金」への寄付が一段落したのも束の間、ウクライナでは侵攻により住む場所を追われた避難者が生活に窮しています。機関紙の売り上げは、今度はウクライナへの人道的な支援として寄付していきたいと思います。ご理解いただき、ご協力をお願いいたします。寄付先と金額については次号の機関紙上でご報告いたします。

編集後記

■コロナのこと、ワクチンのこと、色々な考えの人がいて、迂闊には話題にできない。誰にも正解が分からない以上、どんな考え方もありだと思うし、相手の個人的な考えを尊重したいと思っている。それでもわりと頻繁に説得されかかる。説得しようとしている人も、聞いているほうも、なんだか疲れている。コロナ前はこんなではなかったのに、とつい考えてしまう。コロナそのもの以上に、非寛容や社会的分断が恐ろしい。(大西佐頼)

■新体制になって2度目の機関紙です。ようやく仕上がりに近づきましたが、今回も難産でした。コロナ禍でもZoomを使ってなんとか編集会議を繰り返したものの、ぎりぎりになって原稿をお願いしたみなさん、無理を言って申し訳ありません。快く受けてくださり感謝いたします。今年は物故作家の展覧会があちこちで開かれており、展覧会記録にも多く掲載されています。引き続き次号もその様子を各地の会員にレポートをお願いしているところです。(山田礼二)